

論文の和文要旨	
論文題目	日本語学習者のコロケーション習得に関する研究 —動詞「する」を中心に—
氏名	鈴木綾乃

本研究は、日本語学習者が使用するコロケーションについて、第二言語の習得過程という観点から分析を行ったものである。台湾の大学で日本語を学習する、中国語を教育言語とする学習者から収集した作文データを収録した学習者コーパスをデータとして用い、動詞「する」とどのような語を共起させているかを幅広く分析した。

第1章から第3章では、本研究にかかわる先行研究を概観した。まず第1章では、本研究の理論的背景・方法論的背景として「コロケーション」の定義と第二言語習得、第二言語習得研究で用いられるデータと学習者コーパスについて見た。「コロケーション」という用語は先行研究においてさまざまに定義されてきたが、本研究では (A) 実際の言語データを分析し、それに基づき定義する観点と、(B) 「コロケーション」を「チャンク」の一種と捉える観点、という2つの観点に分けて概観した。そして (A) の観点は母語話者の言語データに基づく定義であるため、学習者言語を分析する上でのコロケーションの定義として不十分であり、(B) の観点で分析する必要があることを示した。一方、第二言語習得研究の分野では、特に言語習得過程の初期において、学習者が定型表現とよばれる分析されないチャンクを使用するという報告がある (Hakuta1974 など)。またこのようなチャンクは、どのような語の結びつきを1つのチャンクとするか、そこにどのような意味・機能をマッピングするかは、独自の体系があるという報告もある (迫田 2001a, b, c, 大関 2008)。そこで本研究では、コロケーションを「チャンク」の一種であるとする (B) の観点を採用し、日本語学習者がどのようなチャンクを形成し、そこにはどのようなルールが存在す

のか、分析を行うこととした。さらにコロケーションの種類についての先行研究を概観し、本研究では、学習者言語において語と語がどのように結びついているか広く分析するために、ある語と、単独の語の共起である語彙的コロケーション、ある語と、語の文法的機能・文法的カテゴリーの共起である文法的コロケーション、ある語と、語の意味的カテゴリーの共起である意味的コロケーションという3つの観点から分析することにした。次に方法論的背景として、これまでの第二言語習得研究で用いられてきたデータと、その収集方法について概観した。そして英語と日本語の学習者コーパスにどのようなものがあるかまとめ、学習者コーパスを用いた分析方法として、「対照中間言語分析 (contrastive interlanguage analysis: CIA)」(Granger1998a など)を挙げた。対照中間言語分析には、学習者と母語話者のコーパスを比較する方法と、学習者と学習者のコーパスを比較する方法があるが、本研究では前者を用いた。

第2章では、これまでに行われてきた第二言語のコロケーション習得研究について概観した。先行研究では、母語話者の言語使用データに基づいてコロケーションを定義し、学習者が使用するコロケーションが母語話者と異なっている、と述べている。しかし、どのように異なっているか、ということや、学習者と母語話者で違いが大きいコロケーションはどのようなものか、といった分析が多く、学習者が使用したコロケーションの背景に、どのような中間言語の体系があるのか、といった分析はほとんど見られなかった。

第3章では、本研究の分析対象である動詞「する」について、先行研究を概観した。まず、「する」の意味とコロケーションについて先行研究をまとめ、本研究での「する」の意味分類を提示した。この中で、「日常の動作等」を表す意味を「する」の中心義、「名詞+する」という形でサ変動詞をつくる用法を中心義に近い派生義、それ以外の変化を表す意味、決定を表す意味などを派生義とした。次に、動詞全般や動詞「する」についての中国語の研究、日本語との対照研究、動詞「する」と名詞の共起、漢語に関する誤用分析をまとめた。そして、日本語と中国語との間にある共起語の違い、品詞の違いによって誤用が起こりうること、また日本語の動詞連用形が名詞として使われるかどうか一致していない、といった日本語の問題もあることを指摘した。

第4章では、本研究の目的、研究設問と、使用したデータの収集・分析方法を述べた。第3章までを踏まえた研究設問は「日本語学習者と日本語母語話者はそれぞれ、動詞「する」と共にどのような語を用いるのか。母語話者と比較した場合の、学習者の特徴は何か。」である。これについて (a) 語彙的コロケーション、(b) 文法的コロケーション、(c) 意味

的コロケーションという3つの観点から分析を行った。分析には、『日本語学習者言語コーパス』（東京外国語大学大学院グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」（平成19-23年度））を使用した。このコーパスにおさめられたデータのうち、台湾の大学で学ぶ学習者102名と、日本語を母語とする大学生59名のデータを分析対象とし、すべての動詞「する」を抽出して分析に使用した。分析対象とした「する」の語数は学習者が3816例、母語話者が1170例である。また学習者のデータについては、「現代書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」（国立国語研究所）と母語話者へのアンケートを使って許容度の判定を行った。

第5章は本研究の分析である。まず、語と語の共起である語彙的コロケーションの分析について、学習者は母語話者に比べ、「勉強」「留学」「心配」「びっくり」「緊張」「食事を」「準備」「参加」「注意」「たり」の10語を過剰使用していた。その一方、「お会い」「お願い」「お借り」が過少使用語として挙げられ、このことから学習者は「お+動詞連用形+する」という“型”をあまり使わないことが推測された。

次に行った、語と語の文法的機能・カテゴリーの共起である文法的コロケーションの分析では、学習者は母語話者より、名詞と動詞を特徴的によく共起させていた。助詞については、学習者は「を」「たり」を「する」とともに使用していたのに対し、母語話者はこの2つに加え「に」「と」も使用していた。また、学習者が「する」とともに使用しなかった“型”として、「お・ご+動詞連用形+する」が挙げられた。

語と、語の意味的カテゴリーの共起である意味的コロケーションについては、学習者と母語話者はどのような意味で「する」を使ったのか、また学習者と母語話者が使用した共起語の意味はどのように分類されるか、という2つの分析を行った。分析の結果、学習者は母語話者よりも「する」の中心義を多く使用し、母語話者は中心義も使用するが派生義も使用していた。また学習者はタスクの内容にかかわらず大学生活、日常生活に関わる語を多く使用したのに対し、母語話者はタスクによって使用した語の意味分類が異なっていた。そして2つの分析から、学習者は母語話者に対して中心義を量的にも、共起語の意味範囲的にも過剰使用しており、一方派生義は過少使用していることが推測された。

第6章では、第5章で行った3つの分析をまとめ、「中心義コロケーション」と「派生義コロケーション」という観点から考察を行った。また、今後の課題と日本語教育への示唆を述べた。語彙的コロケーション、文法的コロケーション、意味的コロケーションという3つの分析を、「する」の意味分類によってまとめた結果、「する」の中心義（日常の動作

等を表す)と、中心義に近い派生義(サ変動詞をつくる)では、「する」と強く特に結びついた語が多数あり、同時に、文法的コロケーションでは、「名詞+を+する」(中心義)、「名詞+する」(中心義に近い派生義)という形でさまざまな語と共起させていた。また意味的コロケーションについても、派生義に比べ創造的な語と語の共起が見られた。このことから分析対象であった学習者は、中心義・中心義に近い派生義については、語と語の固定的な結びつきがある一方で、文法的・意味的結びつきをルールとして創造的に語を組み合わせ使用していたと考えられる。本研究ではこのような中心義とのコロケーションを、「中心義コロケーション」と呼んだ。一方派生義について「赤くする」のような変化を表わす派生義では「形容詞+する」、「行くことにする」のような決定を表わす派生義では「名詞+に+する」という文法的コロケーションが見られたが、その他の派生義では語彙的コロケーションのみが見られた。このことから、派生義の場合、中心義に比べて固定的な結びつきを使用しており、創造的な言語使用は行われていなかったと考えられる。このような派生義とのコロケーションを、本研究では「派生義コロケーション」と呼んだ。語彙的コロケーションは、語と語の結びつきであり、固定的でそのまま使えるチャンクである一方、文法的コロケーションと意味的コロケーションは、語と語のグループの結びつきであり、抽象的でルールのようなものだと考えることができる。中心義コロケーションと派生義コロケーションにおける3つのコロケーションの分析結果から、「する」とのコロケーションの習得は語彙的コロケーションから文法的コロケーション、意味的コロケーションへ、中心義から派生義へと進んでいくと考えられる。英語学習者の増幅詞のコロケーションについて、母語話者が使うコロケーションを基準に分析した Granger (1998b) では、学習者は増幅詞を無作為に語と共起させて使用していた、と述べられている。しかし本研究の分析ではコロケーションをチャンクの一つと考えて分析した結果、学習者の「する」とのコロケーションには一定の傾向が見られ、「中心義コロケーション」と「派生義コロケーション」という、「する」のコロケーションに関する、母語話者とは異なる体系を持っていることが推測された。

最後に今後の課題として、(1)異なるレベルについての分析・縦断的分析の必要性、(2)異なる種類のデータを使った検証、(3)多義語における複数の意味の関係に関する考察、(4)母語の影響に関する考察、という4つを挙げた。また日本語教育への示唆として、これまでの日本語コロケーション教材や英語の類語辞典での手法をふまえ、コロケーション指導の際、語の意味と共起語を同時に扱う、という方法を提案した。